

## 英語上達法

福田浩尚

本日はご多忙中にもかかわらずかくも賑々しくお集まり頂き有難うございます。ご案内のとおり講師としてお招きしております「坂本竜牛」先生は、わが国、比較言語学の泰斗といわれるかたでございます。英語上達法についてのご高説を拝聴したいものでございます。それでは、先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

「私は、ただいま、ご紹介頂きました坂本で、土佐の生まれであります。実は坂本龍馬の末裔にあたり、古くはジョン万次郎とも接触があったとのことと聞いております。私が外国語、なかならずく英語に関する職についているのもなにかの因縁ではないかと考えております。幕末のころの土佐藩は、同じ武士の身分でありながら、上士と下士と別れておりその身分の差は、大変なものであります。わが、坂本家は……」

質問者「先生、前置きは、NHKのドラマを見ていれば分かります。早速本題に入って頂けませんか？」

「いやあ、失礼いたしました。つい、龍馬のことになると、我を忘れてしまいます。ところで、英語上達法とは、当然日本人の英語でありまして、これを論ずるには、なぜ日本人はこうも、英語が下手なのかを申し上げなければなりません。」

(一)

先ず体質のことから申し上げなければなりません。英語をしゃべる西洋人と日本人とは体格が違います。私がまだ学生のじぶんに教わった外国人教師などは、図体が大きく顔も赤ら顔で赤鬼そのものでありました。この男に面と向かってスチュピッドアイデアなどと大声で言われると恐ろしさに震えたものでした。女性に

ついてもそうであります。身体の体格も、日本人に比べ骨太で、声量もあり、たくましいので夜のお勉強なども激しいのではないかと想像されます。」

質問者「先生、なにをおっしゃってるのですか。昼日中、場所柄をわきまえてください」

「いやあ、失礼しました。とにかく、このような体格の違った民族と同じように、息も切らさずにしゃべるなどということは不可能だということですよ。」

質問者「では、なぜ、日本人とそう体格に違いがない、中国人はうまく英語が話せるのですか？彼らは、日本人よりはるかにうまく英語が話せると聞きます。」

「はいそれには、またいくつかのほかの訳(ワケ)があります。」

## (二)

日本語にはなくて、英語や中国語にはあるという音が多くあります。つまり、音声(母音、子音)に中国語と英語ではかなり<sup>2</sup>の共通性があるのです。代表的なものを上げれば、L(エル)とR(アール)であります。中国人もこの二種類の子音を厳密に区別します。中国語を習うとき、先ず初歩の過程では、舌を歯茎につけてとか、上あごの下につけてとか厳しく仕込まれます。F(エフ)とH(エイチ)もそうです。この子音をちゃんと区別して発音しないと、全然意味の異なった単語の意味になってしまうのです。英語をしゃべる外人と会話していると、いつのまにか牛がガラスをおいしそうに食べるようになったりすることがあります。元来、日本語はご承知のとおり母音と子音が組み合わせになって音節をつくり単語を形成しています。英語や中国語その他の多くの言葉のように子音だけで単語の一部となるということはありません。ここに、我々日本人は英語や他の言葉を聞き分けたり発音したりする難しさがあります。

さて、更に、英語を学ぶ上で中国語に比べて、ハンデイキャップがあります。高校の英文法で学ぶように、英語や中国語は普通、

主語＋動詞＋目的語＋補語という文型をとります。ところが日本語ではこの文型はとらず、よく言えば鷹揚、悪く言えばだらめな構成となっております。更に、日本語では言えても、英語では言えない文があります。ちなみに、「象は鼻が長い」と英語で言ってみてください。「象は長い鼻を持つてる」ではいけませんよ。このような文では、主語が「象」から途中で「鼻」に変わったのです。このように、途中で主語が変わるということは、英語においては先ずあり得ません。

### (三)

さて、今まで肺活量とか発音とか日本人と英語を母国語とする民族（これをガイジンとこれから呼びましょう）との違いを述べましたが、実はそんなことよりもっと重要なことを申し上げたい。それは、日本人とガイジンとの間の持っている文化の違いであります。日本人の社会は「恥」の文化とも言われてきました。社会の中においては、こういうことを話したらいけないのではないか、やったらいけないのではないかという意識が日本人のなかにあります。別に法律で規制しているわけでもないのですが、もしそのようなことをすれば、非常に恥ずかしいことだという意識であります。これは、江戸時代の武士階級にひろくあった意識でもし恥をかくくらいならいっそ切腹も辞さないという考えです。この恥という概念が、ガイジンに比べ独特の文化、さらに言語体系を生んだと思います。

まず、「敬語」という言葉の使い方です。この敬語のことを話すときとそれだけでこの講演を終わってしまいますので省略します。色々な表現の仕方があります。ものや動作に「お」をつける。「オアヤヤオハハウエニオアヤマリナサイ」というようにであります。自分の行動に使役を用いて間接的に相手を高める用法があります。使役による謙譲表現です。「このようなステージでウタワセテ頂きうれしいことです。」この場合歌わせたのは誰でもない不特定でしょうが、自分を低めた言い方として通用します。敬

語を使わなければならぬということとはガイジン社会には存在しません。

自分をさす代名詞が種々あるのも日本語の特徴です。自分を、わたし、僕、おれ、おいら、アチキ、朕、拙者……。そしてその場、そのとき、その空気によってうまく使い分けるのが我々日本語の言語文化であります。ガイジン世界、いやおそらく世界中の国の言葉でこれほど、自分をさす代名詞を多く持つてる言語はおそらく無いと言っているでしょう。ちなみに、英語では、I

(アイ)、中国語では我(ウヲー)でその他、男性でも女性でも自分をさす言葉はありません。日本人の社会は複雑な人間関係を構成しており、言語、言葉の使い方がその複雑さを表しております。ところが、第三者を指す代名詞は、日本語ではなく、彼とか彼女とかいう言葉はおそらく、英語のHEやSHE(中国語で言えば他あるいは她)を訳すために当てられたものだと考えます。私の子供のころは、彼女などという言葉は日常で使われず、英語で彼女とコーヒーを飲むなどと言うことを英語から訳すと顔を4赤らめたものでありました。彼女と言えば、母親をさしていたにもかかわらずガールフレンを思い浮かべ英語をまなび始めた中学生からすれば口に出すのも恥ずかしいことだったのでしよう。質問者「今、おっしゃられていることは、どちらかと言えばガイジンが日本語を学ぶうえでの障害ということになりませんか。」

「いや、言葉というものはコミュニケーションの手段であって双方向にかような心です。敬語や謙譲語に慣れた日本人が、英語を使う場合、こんなことを言ったら、変ではないか、ガサツな品のない人間に見られるのではないかと不安になり臆することになります。」

ということ、日本人社会とガイジン社会は日常使われる言葉が大いに違い、その場、そのときに応じて使い分けなくてはなりません。更に、日本人どうしでは、時には、無言である必要もあります。アウンの呼吸などということもあります。このような風

土・文化をもった、我々日本人が英語を話すときにストレートに  
いかないのはむしろ当然のことと思います。

(四)

質問者 「先生、そろそろ本題の英語上達法に入ってもよろしいんじゃないですか。先生のご発言はどれもネガティブな面ばかりが多すぎるように思います。」

「はい、実は私は日本人が英語がうまくなるのは不可能に近いのではないかと考えております。最近、小学校から英語教育を始めようとする施策がありますが、これは、実に愚策なことだと考えています。まず、そんなことをするなら、肺活量を養うためにサッカーや野球をやったほうがいい。また、この複雑な日本文化を学ぶためには、英語より国語のほうをみっちり勉強すべきではないか。それに、私の個人的な嗜好を申し上げれば、ガイジン相手にぺらぺらやるより、大人しい恥ずかしがりやの大和なでこのほうがずくと気に入っている。」

質問者 「どうも、話がおかしくなってきた。折角ですから少しためになる話をしてくれませんか」

「そうですね。では、ひとつだけ、英語の勉強を。このように小学校から英語の勉強をさせて子供たちに期待することを英語で「バイリンガスカイ」と表現します。絵に描いた餅とでも訳しましょうか。ガイジンはこうしたユーモアのセンスのある言い回しをして会話することを実に喜びます。機会があったら使ってみてください。」

終わり

2010年3月